

## 現地通信

1986年10月末からことし2月末まで、フィリピン・ケソン市に住む機会があった。この国での下宿暮らしは初めてで、一般市民の日常生活をゆっくり観察できたことは非常に有益であった。私が住んだまちは、Jose Abad Santos St., Heroes Hill でケソン大通りの長距離バス会社、パントランコの裏側に広がる住宅街。緑の多い静かなよい所だったが、このまちは最初から私に、なんだか心理的圧迫感を与え続けた。その理由は、通りの名前 Jose Abad Santos にあった。

マニラ首都圏には、「ホセ・アバド・サントス通り」というのはいくつもあり、それ自体不思議でもなんでもない。しかし、場所が Heroes Hill であり、カティプーナンの英雄に混じって、国家英雄としてホセ・アバド・サントスが登場していることに、私はフィリピン人の歴史観を強く意識し、フィリピン民族主義について複雑な思いに駆られたのである。そして、これはホセの実兄で共産党副議長のもう一人のサントス、Pedro Abad Santos の存在とかかわっていた。つまり、ペドロが私のフィリピン社会党研究の中心人物だというわけだ。

ホセ・アバド・サントスはパンパンガ州サン・フェルナンドに生まれた有名な法律家である。大東亜戦争が始まった時、彼は司法長官の職にあった。日本軍のマニラ占領で政府がコレヒドール島に移ると、ケソン大統領は彼を財務、農務、および商務長官代理に任命した。ケソン大統領がマッカーサーとともにオーストラリアに逃れると、ホセは「すべての政府業務を遂行する大統領代行」に任命されている。ホセはセブ島でプレート No. 1 の大統領車に乗って活動していたが、1942年4月11日早朝、日本軍に捕えられた。ホセは政府の最高位の人物であり、軍は慎

## ペドロとホセ、二人 のアバド・サントス

鈴木 静 夫\*

重な取り調べを行なった。しかし、ホセは日本への忠誠を拒否、このため軍は5月2日、彼を銃殺刑にした。ホセがフィリピン民衆の間にいまでも圧倒的な支持を得ているのは、彼が死を賭してまで対日協力を拒んだ点にある。民衆は対日協力をして生き延びたバルガス、ラウレル、アキノ、ロハスなどという当時の政界の大物とホセ・アバド・サントスを比較して、彼の愛国心に拍手を送るのである。

だが、ホセの実兄ペドロも名の知れた愛国者で戦前の反米運動の指導者だった。1938年の社共合作まではフィリピン社会党の党首だったペドロも、やはり日本軍に捕えられている。共産党の Crisanto Evangelista 議長、Guillermo Capadocia 書記長およびペドロら党幹部を含む7人は1942年1月、マニラで憲兵隊の急襲を受けた。一緒に捕まった Agapito del Rosario アンヘレス市長(旧社会党員)は日本軍への忠誠を拒否、取り調べ中、逃亡を図り、後に銃殺されている。

フィリピン民族主義をみるうえで、カパドシア書記長とペドロの動きが注目される。まずカパドシアは捕えられた党幹部の合意のうえで、Hukbalahap (フクバラハップ、抗日人民軍)のゲリラ地区に行き、「抗米」のための対日協力を呼びかける。党中央は直ちにカパドシアを捕え、党籍を剥奪、武装解除してコックの地位におとす。一方、その後、釈放されたペドロは表だった対日協力はしなかったが、フク団に対して投降を呼びかけた形跡がある。

フィリピン社会でペドロ・アバド・サントスは人気がない。アバド・サントスといえば、ホセのことに決まっている。調べてみたがマニラ首都圏で、道路名にペドロの名が冠せられた所はない。あるとき下宿でホセとペドロの違いを話題にしてみたら、退役陸軍大佐というご主人は、(共産党を持ちあげるような) そんな話には乗れん、といった顔で困惑していた。また、民族主義的立場でよく知られる社会評

\* Suzuki Shizuo, Faculty of International Relations, University of Shizuoka, 395 Yada, Shizuoka 420, Japan

論者は「ホセかペドロかといえば、断然、ホセの方が愛国者だ」とニベもなかった。

もちろん、ペドロの肩を持つ人がいないわけではない。旧社会党系の人たちだ。話は少し古くなるが、1984年5月の国政選挙を見るためアンヘレスに行ったとき、サントス家の血を引く、あるアバド・サントス氏に会った。地方政治家のこの人に、実際はペドロのことを言うつもりで「ホセ・アバド・サントスを知っている」と言ってしまった。彼は色をなして、「ペドロこそ、真の愛国者であった」と私に説明した。青年時代からペドロに育てられた元フク団総司令官の Luis Taruc 氏がペドロに心酔しているのは当然のことだろう。

だが、問題はアンヘレスのアバド・サントス氏という「真の愛国主義」なのだ。当時、フィリピンはアメリカの植民地であったが、全国民は日本を侵略者と考え、日本との戦いに愛国主義をみた。伝統的な親米感情は、侵略者から国を守る愛国主義の中で説明された。彼らはアメリカのために抗日をしたのではなかった。援米は日本軍を打倒するためであり、米軍によるフィリピン再占領は問題になるどころか、大歓迎されたのである。社共合作後の共産党も基本的にはこの立場をとった。

だが、結果的には親米となる抗日運動に疑問をもった人たちがいた。それが戦前、反米運動をしてきた共産党の被逮捕組であった。タルク氏によると、カパドシアはフク団のゲリラに対し、当面、対日協力によって米国勢力を一挙にフィリピンから追放することを説いた、といわれる。共産党が一貫して主張してきたように、アメリカがフィリピンの侵略者だったとしても、それを打倒するために「もう一つの侵略者・日本」と協力することには論理的な矛盾があった。それが「抗日抗米」の提唱であれば話は別だったろう。もちろん、その場合でも、当時の政治的環境の中で「抗日抗米」が実現する余地はほとんどなかった。従ってカパドシアもペドロも、フィリピン政治の流れの中でみれば、政治経歴に疑点を残したことになる。しかし、「抗米」の論理は論理である。1968年、新たに登場した共産党は、「ラバ・タルクの黒いブルジョア集団が、抗日抗米の正

しい路線をサボタージュした」と非難した。ここでは「抗米」を主張したカパドシアの主張が部分的に認められている。「抗日抗米」は本来、フィリピンの真の独立に関することであつた。しかし、この国の民族主義はそこまで高められてはおらず、対日問題は、連合国が日本の軍国主義の強さをどう計ったかで決められた。日本の軍ファシズム打倒こそ自由世界の目標だったとすれば、ソ連の提唱していた反ファシズム統一戦線の世界的構築は緊急の課題でなければならなかった。歴代の共産党議長を務めたラバ三兄弟の末弟の Jesus Lava 氏は1985年の SOLIDARITY 誌 (No. 102) でこの路線の正しさを主張している。だが、同じ紙面でタルク氏はフク団の名前を People's Army of Liberation (人民解放軍) と提唱したのにもかかわらず、中国人顧問が抗日一点張りの People's Anti-Japanese Army とした、と（「抗米」を除外した）党の路線面での弱さを批判している。また、Castro Alejandrino 氏（戦前のアラヤット町長、旧社会党）も「党指導部は外国人のいうことを無批判に受け入れてしまい、私も含めて、他国の愛国者がもう一つの国を愛するようにはなれないことに、思いおよばなかった」と反省している。これらの発言は、まだ、かなり抑制の効いたものではあるが、抗日戦争で同時に抗米戦争が戦えなかったことに対する弁解のように聞こえるのである。彼らの主張は「抗米」の視点をはずさなかったペドロ、カパドシアのそれに近づいている。なぜなら、年をとったとはいえ、かつてのフク団ゲリラたちは、いまでも彼らがフィリピン・ナショナリズムの名において、あの戦争を闘ったと考えているからである。

こういうわけで、私が初めて下宿したまちの通りの主人公の名は、フィリピン民族主義のほぼ中心的問題をはらんでいた。私が日本人であるかどうかを離れて、やはりこの通りの名前がホセで始まるのか、あるいはペドロで始まるのかはフィリピン民族主義研究者すべてにとって、そう無関心でいられる問題ではないように思われる。（静岡県立大学国際関係学部教授）